

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2671400253		
法人名	ウェルコンサル株式会社		
事業所名	フレンド平城山・山城(フレンド平城山)		
所在地	〒619-0215 京都府木津川市梅美台2丁目1-1		
自己評価作成日	平成23年12月20日	評価結果市町村受理日	平成24年4月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2671400253&SCD=320&PCD=26
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 市民生活総合サポートセンター		
所在地	〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目4番17号 千代田第1ビル		
訪問調査日	平成24年2月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

個人の尊厳を維持し、個別ケアでの対応を重要視している。その為にスタッフ教育に力を入れ、ひとりひとりの知識・技量向上に努めている。車椅子対応の方も新規入居が可能であり、認知症介護だけでなく、その方の持つ全ての障害をクリアできるよう心掛けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

郊外の住宅地にある当該ホームは、地域の一員として地域行事に積極的に参加したり、ホームから「フレンド便り」を回覧しホームの様子や行事案内など情報を発信するなどの地道な活動を続け、開設して9年が経ち、気軽に訪問できるホームとなっています。管理者は家族との連絡を密にとり、利用者の様子を伝えたり、行事の声かけなどコミュニケーションを図っています。職員は常にゆったりした対応を心がけ、ケア担当者からは家族宛に生活の様子や身体状況を書いた「ひとこと通信」を毎月送っています。それらの支援は利用者、家族の安心に、また職員の気づきや振り返る力の向上に繋がっています。利用者の気持ちを常に優先に考え個別ケアに重点を置き支援しているホームです。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	1. 自分らしい安心できる生活をお手伝いします。2. 入居者の尊厳を守ります。3. 地域との連携に努めます。の運営理念を玄関に掲げ、いつも眼につくようにしている。職員会議等でこの理念のもと常に意思の統一を図り、日々の介護で実践している。	グループホーム設立時に作った理念「プロのいる家庭」は、ケア会議で内容について話し合い、確認しています。日々のミーティングで管理者が言葉かけをして理念を振り返るよう努め、企業理念の1つである「地域との連携」を意識しながら日々のケアに繋げています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会員としてご近所との交流を積極的に行っている。散歩時の挨拶も忘れず、窓越しに気軽に話せるお付き合いをしている。地域の方々のグループホームについての理解を深めてもらう為に、「フレンド便り」を不定期だが配布している。又、自治会会合に参加したり、クリーンデイ等自治会の催しに参加している。	地元行事に積極的に参加しています。夏祭りでは企画から関わり出店したり、年2回の地域の清掃に利用者に参加しています。ホームの行事も地域に開放し、花火大会や餅つきを楽しむなど地域の一員として日常的な交流が構築されています。中学校の体験学習の受け入れも行きホームの理解にも繋げています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症介護の相談や見学を受け入れて、役立つように心掛けている。他方では、地域の小学校や中学校の体験学習としての訪問を受け入れている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営会議についての理解を得られるようになり、定期開催できるようになった。家族などの意見を伺い、情報提供もお願いし、サービスに反映しつつある。	会議は2ヶ月に1回開催され、家族、民生委員、地域住民、高齢介護課職員又は地域包括支援センターの参加があり、ホームから写真を見ながら活動報告をしたりや意見交換、地元の習慣の情報提供など、サービスに反映できる有意義な会議となっています。議事録はまとめて家族に送り、参加していない家族にも知ってもらっています。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	木津川市から度々訪問を受けており、グループホームの生活状況を見てもらったり、指導をもらったりしている。又、希望者の方々にはホームの紹介をしてもらっている。運動会には町内の小学校を使用させてもらったことがある。	市の高齢介護課や健康推進課の職員の訪問が度々あり、日常的に交流があります。地域包括支援センターの依頼で警察、消防、家族向けに認知症の講習会をしたり、ホームからも相談があれば気軽に電話するなど協力関係が構築されています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が身体拘束について周知しており、拘束のない暮らしを目指している。入居者の動向を職員全員が素早く察知できるようにしているので施錠はしていない。外出したい人が居れば一緒に一回りして帰ってくるようにしている。	玄関は施錠せず、外出される方にはさりげない見守りや声かけで利用者の思いに寄り添い対応しています。年1回、内部研修を実施し、欠席者には伝達研修を行い、身体拘束について振り返る機会を作っています。言葉の拘束についても事例を挙げて話し合い、職員の理解を深めています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者は外部研修を通じて学び、その内容を職員に説明・教育している。事業所内で虐待行為をしたことはない。		

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は外部研修を通じて学び、その内容を職員に説明・教育している。成年後見制度を利用されている方が1名おられる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書、利用契約書等を文書で示し説明している。説明に当たっては、一方的にならないように理解いただけたか、疑問点はないかを確認しながら行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	管理者及び職員は利用者との日ごろの対応・会話を通じて、苦情・不満などを汲み取るように努めている。それらをスタッフ会議でオープンにし、利用者の思いに応えるようにしている。外部へ表せるルートは殆どが家族であることから、家族の声にも真摯に取り組んでいる。又、契約時に苦情受付窓口について説明している。	利用者とは日々の会話や行動から希望を汲み取るように心がけ、家族へは2ヶ月に1回運営推進会議参加の電話を入れた時や来訪された時などに意見を聞くようにしています。出された要望などは運営推進会議で取り上げて検討しています。利用者の要望を聞き、お餅つき会を開き、地域に伝わる餅の作り方を地域の方に実演してもらうなどの例もあります。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人代表者は管理者、ユニットリーダーの意見を聴き、最終判断している。又、管理者はケア会議などで職員の意見を吸い上げ、リーダー会議などで検討し、反映させている。	管理者は職員からの信頼も厚く信頼関係が築かれ、日常的に意見や要望が出やすい職場環境となっています。また月1回のケア会議時や年2回の個人面談時に意見や要望をじっくり聞く機会を設けています。出された意見はリーダー会議で検討しケアに反映できるようにしているため、職員のやる気にも繋がっています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者と幹部従業員などが参加する会議を月に1回設けており、職場環境等の不具合の発生には早急な対応を図れるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人研修、中段階研修、サブリーダー研修。リーダー研修を順次行っている。又、認知症介護実践者研修、管理者研修、リーダー研修を計画的に受けさせている。現場ではチェックリストを使いスタッフのスキルアップに役立っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	運営者はグループホーム運営協議会を立ち上げ、情報交換、勉強会の場を設定している。		

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者に関しての問い合わせが合ったときや、初期面談時には、利用勧誘を前面に推し進めるのではなく、本人の困っていること、不安なことをよく聴くように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者に関しての問い合わせが合ったときや、初期面談時には、利用勧誘を前面に推し進めるのではなく、家族の困っていること、不安なことをよく聴くように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事業所に相談がある時は殆どがグループホーム利用が前提であるが、本当にグループホームでよいのか、一歩引いて観るように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事の準備、洗濯物の片付けや植物の水やりを助けていただいたりしている。又、植物の育て方、折り紙の折り方、食事のメニューなど教えていただくように図っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日ごろの連絡はもとより、1ヶ月に1回はスタッフからの一言通信(様子をまとめたもの)、写真、フレンド便りを送付し、関係維持・向上に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	年末年始やお盆に家族と過ごす希望者には、薬や健康状態を説明し、支援している。又、車等で希望場所への観光に出掛けている。	今まで利用していた美容院や病院への送迎を行ったり、家族と一緒に墓参りに行く支援をしています。友人の来訪があれば一緒にゆっくりと時間を過ごして頂き、また友人との電話の取次ぎや年賀状の支援など、馴染みの関係が途切れないよう努めています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	不意な立ち上がりなど危険を察知したとき、職員に知らせてもらったり、車椅子を押してもらったりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院が見込まれ退居された方がいるが、定期的に見舞いに伺った事例がある。特養など他の介護保険施設に移られた場合もお顔を見に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の意向に沿った過ごし方をしてもらっている。強制したり、全員同じようにということはしていない。	日常的な会話や選択の場面から要望を聞き取ったり、困難な方は表情や行動から意向を汲み取るようにしています。情報は記録に残し申し送り時に伝達したり、ケア会議で担当者を中心に利用者の様子を伝え、職員全員で思いを共有し把握する体制をつくっています。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人の生活史などを把握するシート。生活の流れに沿った[出来ること出来ないこと]の把握シートなどを作成し、アセスメントに活用している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各々の方の過ごし方や心身状態を職員が把握し連絡をとりあっている。又、ヒヤリハットなどのツールを利用して情報の共有を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日ごろから入居者の意見を聴き、家族カンファレンスを行っている。それらに加えて職員が意見やアイデアを出し合って介護計画を作成している。	日々の介護記録を基に定期的なケア会議で利用者全員について話し合い、状況の把握と共有をしてケアプランを立てています。ケアプランは3ヶ月に1回評価し変化がない場合は6ヶ月に1回見直しをしています。見直し時には担当職員、管理者、看護師、家族の意見を聞いてプランに反映しています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別にファイルを用意し、日常の暮らしの様子やバイタル値、排泄状況、食事量、往診時の看護記録などを記録している。日常の変化や気づきを個別ケアに反映できるようケア会議にて検討を繰り返している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	認知症共同生活介護であり、多機能を有しているとはいえない。強いて言えば、介護予防型および短期利用型の利用を可能にしており、ニーズがあれば応えられる。ただし、空室がなく、受け入れ実績はない。		

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	管理者が利用者全体の必要性を考慮して相手先を都度取捨選択している。殆どがボランティアのレク応援である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	2週間に1回の内科往診がある。他の専門医についても、精神科、眼科、皮膚科等の受診が必要になった場合は家族に連絡を取り、希望があれば、往診依頼又は、受診するようになっている。	入居前にかかりつけ医の選択について説明し、現在も往診、受診で今までのかかりつけ医を継続されている方がおられます。2週間に1回協力医の往診があり、受診結果は家族に電話報告をしています。協力医とは24時間緊急連絡が可能です。看護職員が日常的な健康管理を行い、適切な医療を受けられる体制づくりがなされています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	健康管理の為に看護職員を確保し、週に2回以上、全入居者の状態確認をしている。気の付いたことは、スタッフや往診医に伝えるようになっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族を交えて、病院の担当者と現況や予後を話し合い早期の退院を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化対応指針を策定し、重度化、終末期に入る前には往診医、看護師、職員が家族とカンファレンスを行い、方針を決めている。	重度化になった場合の対応指針については入居時に説明し、重度化になった場合、事業所の対応指針について再度確認して家族、職員、医師、看護師で話し合い、方針を決めて対応しています。職員が本人や家族の思いや意向に添いながら前向きに取り組めるよう、話し合いを重ね方向性を定めています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し職員に周知・徹底している。看護師による応急手当の指導を全職員が受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練計画を策定し、年に2回の避難訓練及び消火訓練を行っている。近隣の方には、非常時の応援をお願いできるよう申し入れている。	年2回昼夜想定での避難訓練を行っています。夜想定はホーム独自で、昼想定は消防署立会いのもと消化訓練と同時に行っています。運営推進会議で訓練の報告を行い、何かあれば地域の方々に協力していただくよう依頼しています。	

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者個人の個性、人格を尊重した言葉を掛け、対応をし、入居者に共感するようにしている。又、排泄表などの個人ファイルは目につかないところにおいており、リビング内での排泄などの会話も配慮している。	プライバシー保護について年1回内部研修を実施しています。トイレ誘導は周辺に配慮しながら声掛けし、介助時の扉の開閉にも留意しています。不適切な対応があった場合は管理者が都度注意をしています。介護チェックリストにプライバシーの項目があり、3ヶ月毎に自己評価をすることで気づきや振り返りの機会がつけられています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	洋服の選択、献立の希望やレクリエーション内容、外出の希望等を聴きながら進めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務時間は後で取り戻せるとの共通認識から、入居者優先として入居者ペースにあわせている。入居者個々のライフスタイルで過ごしてもらえよう、自室でおられる時間帯は部屋の外から見守りを行ったりしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個人の希望による髪型や服装にしているが、いつも同じにならないように、声掛けし支援している。パーマ希望の入居者には、家族と連絡を取って、美容院の利用を支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日の献立は入居者の好みに合うもの、希望のあるものになっている。季節感も重視し、また、昔ながらの行事色のある食事内容や個人の誕生日祝の食事もしている。食事の準備や片付けも職員と一緒にいつもしてもらっている。	献立はその日の冷蔵庫の中味を見て決めています。利用者は野菜の下ごしらえや、洗いや、片付けなど出来る事を見つけ職員と一緒にに行っています。プランター菜園で収穫した野菜を使ったり、季節の行事食、誕生会、外食にも出かけるなど食事が楽しみとなるよう支援しています。	利用者の重度化で食事介助が増えていますが、より家族的な雰囲気の中で食事をしてもらうために、時には職員も同席してゆっくり会話を楽しみながら一緒に食事をする機会を作られては如何でしょうか。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の摂取カロリー、必要水分量、栄養のバランスをおおよそ把握している。食べ残された為に不足の場合は替わりのもので補っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	年に一度の歯科定期検診、毎食後の歯磨き誘導を行っている。痛みや治療が必要な場合には家族に連絡をとって、往診、受診の支援をしている。入れ歯は夜間、消毒液につけて保管している。		

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別に排泄表を作り、昼夜のトイレ誘導を行って、できるだけトイレでの排泄を促している。トイレ誘導、介助はさりげなく行っている。特に失禁時には周囲の方にも気を配り、声を出しての促しは避け、さりげなく誘導している。	トイレでの排泄を基本とし、排泄チェック表や個別の排泄表で個々のタイミングや状況を把握して誘導しながら自立支援を行っています。自宅で紙パンツを利用されていましたが誘導により失禁が減り、布パンツへ移行された方もおられます。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘になりやすい入居者が多いので、果物・野菜の多い食事になっている。その人ごとの定時にトイレに誘導している。散歩と運動を毎日している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴時間、回数の希望を聴き、ゆっくり入浴していただけるようにしている。入浴は1名ずつ行い基本的に同性の介護者が介助することになっている。入浴中は脱衣場と浴室の戸を閉め、プライバシーに配慮している。	入浴の時間、回数、曜日の希望を聞き夜間の対応もしています。職員と会話を楽しみながら入浴し、1時間位入浴している方もおり、関係構築のよい機会になっています。また好みのシャンプーの利用や季節湯なども取り入れています。拒否の方には時間を変えて声かけするなど、無理のない入浴を支援しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	散歩、掃除、食事作り、体操、レクリエーションなど、日中の活動を通じて、個々に合った生活のリズムを作るように配慮している。必要などときには職員が個室に付き添い、ゆっくりと話しながら休息してもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	運営者はグループホーム運営協議会を立ち上げ、情報交換、勉強会の場を設定している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除、洗濯や取り入れ、食事の手伝い、買い物などは能力に応じて役割分担している。裁縫の好きな方、書道の好きな方、手作業の好きな方に材料を用意し、応援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日の散歩やスーパーへの買い物、及び季節に応じてピクニック、食事会、音楽会、運動会を催し、参加してもらっている。又、自治会の催しや掃除にも職員と共に参加している。	毎日食材や備品の買物、散歩に出かけ、天候がよい日には車いすの方も一緒に近くの公園で体操をしています。またホームの行事の食事会や音楽会、地域の行事の運動会や夏祭り、クリーンデーでは職員と一緒に地域の掃除で参加するなど地域の協力を得ながら外出する機会を作っています。	

フレンド平城山・山城(フレンド平城山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人一人のお小遣いを、家人と相談の上管理しており、買い物レクなどを行い、有意義に使っていただけるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛ける希望には呼び出しをして受話器を手渡している。かかってきた場合は、受話器を手渡してゆっくり話してもらっている。季節の頼り、行事の案内状を皆で手作りして家族に郵送している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭的なリビングで、自由に過ごせるようソファ・椅子を置いて場所を確保しており、気のあった方々で楽しく過ごされている。又、四季折々の花飾りし、装飾品も手作りしている。家具備品は全て家庭用で揃えている。	壁画担当者と利用者が一緒に飾り付けた毎月の手作りカレンダーや季節の装飾、環境当番が準備した花、行事時の利用者の写真など季節感を大切にした温かみのある空間づくりがなされています。また様々なソファが置かれ利用者がその時々に応じて過ごすことができるよう配慮されています。温度、湿度計を設置し快適な室温に保つよう管理しています。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	家庭的なリビングで、気のあった方々で楽しく過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来るだけ慣れ親しんだ家具などを持参していただき、居室配置もお話を伺いながら住み慣れた環境に近づけている。	家族と相談してテレビ、家具、家族の写真、遺影など思い思いのものを持参されています。備付けのベッドがありますが希望があれば畳での対応もするなど、居心地よく暮らしてもらえるよう支援しています。居室内の温湿度には気をつけ、個々に合わせて適宜調整しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアはバリアフリーでほぼ全ての場所へ手すりを伝って移動できるようになっている。各居室・トイレ・浴室などのドアに絵入りや分かりやすい文字にて表札を掲げている。		